



海人

現場最前線

作業船の整備・修理に日々奔走

日本海工株式会社 土木部機材グループ課長
林 純一郎 さん

はやし・じゅんいちろう

会社が保有する作業船や重機の整備・修理を担当している。現在は今後計画されている大型工事への投入を予定している作業船を改造するために、依頼先の造船所に常駐して工務監督的な立場で調整に奔走する日々を送っている。

大学の機械工学科を卒業し、師事した教授の紹介で日本海工に就職した。今年で27年になる。入社1年目こそ会社が手掛ける工事のことを知るために現場に配属されていたが、その後は一貫して機材グループに所属している。作業船などの軽微な修理から大型の改造、新造設に至るまで全国を飛び回って対応に当たってきた。かつては作業船の修理対応などで海外の現場まで出向いていったこともあった。

主力としている海上地盤改良工事に用いる3隻のサンドコンパクションパイル船をはじめ、揚錨船、陸上重機などを保有して事業を手掛けている



サンドコンパクションパイル船

同社。現場に出ている船長や機関長から連絡が入れば、修理や設備の追加などの段取りを付けておき、次の現場に行くまでの間に整備を行う。機材グループのメンバーで自ら修理を行うこともあれば、必要に応じて協力会社に作業をお願いすることもある。

大切なのは現場に出て大変な思いをする船長や機関長らの要望に可能な限り応えることだと考えている。林氏の元には現場に出ている作業船から随時、要望事項が寄せられてくる。常にそれを的確に把握できるように、日々やりとりすることが必要だと考えているという。

「同期の船長もいれば、自分より年下もいる。彼らが機械のことで余計なことを考えなくて済むように心掛けておくことが自分の役目」と自認。いつでも遠慮無くさまざまなことが伝えられるよう、コミュニケーションを積極的に取るように意識しているという。その一方で、何かあればすぐに言うてくる船長らからの連絡が少なかったとしても「便りが無いのは元気な証拠」と考えるようにしている。互いに信頼している間柄だからこそ、そう思えるそうだ。

保有船や機材の修理・整備を手掛ける中で「機械が問題なく動いてくれること」が仕事をする上での何よりのやりがいとなる。

これまで全国を飛び回って対応してきた中で、それぞれの地域で信頼の置ける外注先とも良好な関係性を築いていくことができた。各地に相談できる人たちがいれば、連絡を取って「これ早急にお願いしますことができますか」などと助けを請うことができる。そうした人たちの存在は自身にとって大きな財産であると考えている。

年齢が50歳を過ぎ、これからは後進を育てることに力も注ぎたいと思い始めている。今の若手は自分たちの頃と違って互いに助け合える同期も少ない状況にある。そうした中でも興味を持つ部分を伸ばしていきながら「そこから広げて、必要なことを勉強したり、資格取得にも挑戦したりしてもらえるようになってほしい」と期待を寄せている。